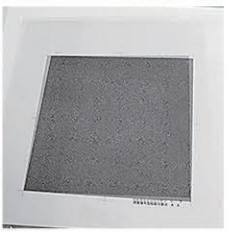

初開催「印刷実験室」に900人来場

印刷の可能性を実証

印青連

1月24日、東京都千代田区北の丸公園の科学技術館で、印刷産業青年連絡協議会（印青連、茂木徳久会長）が「印刷実験室」を開催。商印に製本、スクリーンにラベル、光沢加工に製版など所属11団体それぞれの個性が光る約80作品が並び、900人が来場した。

◇◇◇

会場入り口で来場者を待ち構えたのは、白衣姿の運営メンバーと札束の山。実験『3億円を用意しました』は、よく耳にする3億円はどんな量か、という素朴な疑問を印刷のプロが実際に形にしたもの。まさに印刷実験室の企画コンセプトを体現した展示だ。使用する紙の色や手触りにもこだわり、紙幣ぽさを追求したのだという。3億円（を模したもの）を目の当たりにして、早速記念撮影大会が始まった。

『ガリ版印刷実験』の一角にはカラシにバニラエッセンス、ジバンシーの香水と印刷と無縁のものが。調味料は香料インキの代替となるのか否かを実証した。

『タック加工を用いた砂絵の実験』は、スクリーン印刷技術を応用。のり印刷を施した一見何もないシートに蛍光色のパウダー粒子をハケを使いなぞっていくと、モナリザの姿が出現する仕掛けだ。蛍光色のハイキーなモナリザは、蓄光性により暗闇で光る凝りよう。子供に交じって大人も実験に臨み、ポップなお土産を喜んで持ち帰った。

正札青年部の㈲カムシーリングは木製シールに古着シール、8回通し多層シールと実に5点を出品。研究者魂を示してみせた城篤史氏のコメントは次の通り。

「私が担当した実験のテーマは〝道端で拾ったもので印刷〟でした。そこで木の葉を版に見立て版胴に貼り印刷したところ、葉脈までしっかりと出た印刷物が完成。版胴に版以外のものを貼ると新しい表現ができる、という発見がありました。実用的なモノから誰もやらないであろう飛び抜けたモノまで、さまざまな実験の成果品から『印刷加工』の可能性がまた広がったと実感しました」

『断裁機でいろいろなものを切る』では、ハンバーガーを見事に断裁するもゆでたまごを切ろうとして下の皿まで断ち切った、非日常的な記録写真の数々が何ともシュール。また透明のフィルムを用いた『カラーデータを4版に分けて1版ずつインクジェット出力し、重ね合わせたらカラー画像になるのか』や『ピンクマスターでカラー印刷』といった実践的検証も。さらに『印刷通販会社を比較してみよう』では、大手4社を選び同データでどんな「差」が出るのか現物で検証。電話対応の品質や増刷依頼時の柔軟性、納期比較も赤裸々にリポートした。

ニヤリとする実験・感心する実験・思わず噴き出す実験・舌を巻く実験――。マジメにふざける若き〝印刷科学者〟たちの術中に率先してハマる来場者で、実験室は終始笑顔と歓声に溢れていた。

印刷実験室責任者総括
竹岡慎一氏（正札青年部）

「展示」「体験」「実験」「総務広報」の4チームに分かれて準備を行いました。従来のイベントと大きく違う所は、積極的におバカな品物を作ったり、くだらないと思うものを集めたりした点。各担当者は「何で？」「意味あるの？」など疑問もあったと思います。しかし、当日すべてのピースが出揃った時にはこの疑問も払拭されました。来場者以上に、われわれ自身がイベントを楽しんだのではないでしょうか。

狙い通り感心、感動、失笑といった「笑い」を届けながらも印刷の魅力を伝える。印青連らしい・印青連しかできない印刷実験室となりました。

（左上）ワークショップも複数実施（左下）宮坂次郎印青連前会長の手ほどきを受け簡易スクリーン機で印刷を体験（右上）子供に人気だった「飛び出す絵本づくり」（右下）緻密なモザイク状の2枚が重なると隠れた絵が